



第二回国際コンパニオン

1998年5月プラチスラバ

—— エリザベス・オリバー

アニマル福祉会議

前号に引き続き、今年5月にスロバキアのプラチスラバで開かれた国際コンパニオンアニマル福祉会議について報告します。

第二部 ペットの身元確認

(レイ・ブッチャー、及びリチャード・フライ両獣医の講演から)

日本では、毎年多数のペットが、身元確認ができないという理由で、保健所によって必要もないのに処分されています。現在のペット登録システムは、時代遅れで、役に立ちません。登録番号のついた鑑札は、犬の首輪に取り付けることになっています。しかし、鑑札は取れやすいし、首輪がはずれるとなくなったりします。番号自体も小さくて見えにくいものです。今や、世界の多くの国では、ペットの登録にマイクロチップが使われるようになってきています。ヨーロッパ大陸諸国、イギリス、オーストラリアではすでに実施され、最近では、台湾もその仲間入りをしました。日本にその技術がないわけではありません。実際、多くのマイクロチップ製造業者が、ペット用マイクロチップの製造許可が下りるのを待ち望んでいるのですから。この問題について日本の対応が遅れているのは、官僚主義と、動物の待遇改善に対する政治的関心が一般にうすいことにあります。

レイ・ブッチャー氏は幾つかのペットID(身元確認)システムの方法について、その利点と欠点を次のように考察しています。

有効なペットのIDシステムとは? 次のような条件が考えられます。

- * ペットを飼い主に戻すシステムの基盤になるもの——すなわち、迷子のペットを飼い主のもとにすみやかに戻すことができるものであること。
 - * 去勢済みの野生化した動物の身元確認を管理計画の一環としてできるもの。
 - * ペット登録システムの基礎をなすもの。
 - * ペットが盗まれた場合に、飼い主を証明できるもの。
 - * 国のワクチン計画(例えば、狂犬病管理など)の基礎になるもの。
 - * 遺伝性の病気(例えば、股関節形成異常とか種々の眼疾など)をもっているという獣医の証明が確認できるもの。
 - * 輸出入(国家間のペット輸送)をするための獣医の証明が確認できるもの。
- 身元確認にはどのような方法があるのでしょうか?

うか?

首輪と鑑札

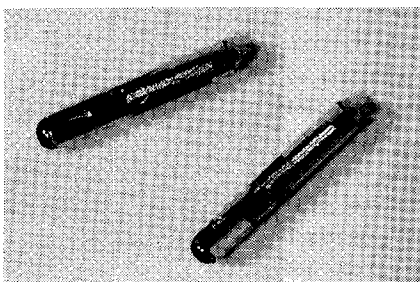
ペットと飼い主の詳細について簡単に知らせることのできる便利な方法。安い費用で特別の装置もいらず、目で見てすぐにわかる方法です。しかし、首輪と鑑札は永続性のあるものではなく、失われやすいという欠点があります。また、不正な目的や盗むために取り外されたり、改ざんされたりするおそれもあります。

入れ墨

入れ墨は長期的に身元を確認できる有効な方法として長年認められてきました。動物の表皮に記され、はっきりと見てとれるという利点があります。

しかし、この方法には次のような欠点が考えられます。

- * 動物にかなりの苦痛を与える技法である。
- * 入れた字は時間がたつと薄れる。(通常3年ぐらいで)
- * 手書きの字体は、国際的な基準では解読す



るのがむずかしいかもしれない。(例えば、6と9は誤ってさかさまに読まれる可能性がある)

- * 番号を入れ込んだり記録したりする際に人的なミスが生じる可能性が大きい。
- * 番号が不正に改ざんされるおそれがある。
- * 国際的な規模では、登録番号に必要な数字の桁数が多すぎて実用に向かないかも知れない。(例えば、ネコの耳の内側におさまりきらないなど)

以上のように、この2つの方法(首輪と鑑札、入れ墨)には難点があるので、代わって、マイクロチップが国際的に認められるIDシステムの最も有効な方法として進出してきたのです。このシステムの特徴は何か? 以下の要件を満たす限り、最も望ましいIDシステムといえます。

- * ペットの一生を通じて有効性のある独特の改ざん防止番号をつける。

* 国際的な規模で全ペットの身元を確認できる十分な能力をもつ。

* 適用しやすく、苦痛もなく、安全で、費用も安い方法である。

* 国際的に承認されたシステムを備える。

* オペレーターのミスを最小限におさえる方式をとる。

マイクロチップを埋め込む箇所

現在のところ、この問題に関して国際的な取り決めはなされていません。イギリスでは、マイクロチップはペットの両肩甲骨の間に埋め込まれています。挿入しやすい箇所だからです。しかし、ここは一般にワクチンや抗生物質などの注射を打つ箇所でもあるのです。従って、ヨーロッパ大陸諸国では、マイクロチップは首の左側に埋め込むのが普通です。

スキニング(走査)

すべてのペットは新しいチップを埋め込む前に、体内にすでに“チップが挿入されて”いないかどうかを調べるために、からだ全体を走査する必要があります。チップを埋め込む箇所が幾つかあるからで、また、チップが体の別の場所に移動することもありうるからです。

マイクロチップを埋め込んだ動物が、体内にすでに“チップが入っている”ことを示すために首輪にディスクを装着することが有効だと考えられています。

リチャード・フライ氏は、次のように講演を締めくくっています。

マイクロチップは、ここ20年の間に大いに進歩してきました。もとはと言えば、保険会社が、血統馬の詐欺、盗難に関する不正な支払い請求に直面したことから発展してきたシステムなのです。現在では、マイクロチップは、絶滅の危機に瀕している種(ウミガメ、ペンギン、ワニ、魚など)を追跡するために使われたり、樹木を保護するためにも使用されています。その利用価値は、際限もなく大きいといえます。

初期の頃には、互換性のない幾つものシステムがありました。しかし、国際的に合意された共通のシステムがあればこの上もなく便利なのは明白でした。1996年2月に、ようやく、ISO(国際標準化機構)規格が認められました。やがては、すべてのシステムがこの国際規格と相容れるようになることでしょう。

マイクロチップは、明らかに定着しつつあります。使用されるチップの数は、毎年50万個も増え続けているのです。